

おもい月記

東大寺二月堂のお水取りと共に寒い冬の別れを告げ、三月は春へ土のぬくもりが伝わってくる季節。

三月六日は、啓蟄^{けいちつ}である。啓蟄とは大気の温度があがって、土の中の虫がはい出てくるという意味だそうだ。

あらゆる生き物が冬の寒さにジツと耐え、春を待つ。地球という一つの物体の中で。地球には、光や水・空気があるから生物が住み、存在している。いわば、鳥も獣も植物もみんな運命共同体であるけれど、その中身は憎しみあい殺しあう世界なのだ。

お釈迦様のお話（仏典童話）にこんな話がある。

「ある野原で、蛙がたくさん集まってケロケロケロケロとみんな泣いている。その中央には小さな石がいくつも積んであって、蛇に飲まれた蛙のお墓と書いてある。蛙達は蛇に飲まれた友達の死を悲しんで泣いている。蛇というヤツはなんてむごいヤツだ。につつきヤツだと口々にわめき、悲しんでいると、ある一匹の蛙が向こうの方でも何かお墓の様なものがある、何か聞こえると云うのでみんな近寄ってみると、そこにはミミズがうじょうじよいて、こちらも悲しくて、泣いている。そして真ん中には蛙に飲まれたミミズのお墓と書いてあった。」というお話。

さて人間はどれだけ生命をいただいているでしょうね。

無数の、数限りない生命の上に生かされているのを知っているのは、おそらく人間だけでしょう。

生かされているという心を失い、スマホやメールの利便性を伴ったラインに酔いしれて自分の思いを相手に知らせ即返答を求める、気に入らなければ相手を誹謗中傷する。人の命や心も簡単に奪って捨てていく。

日本の文化は仏教と共に進んできたが、今は仏教の教えが絶えてしまったのだろうか。敬い・尊び・感謝する心・拝む心を伝えなければならぬのは大人の重い責任だろう。今外国の人が素晴らしいと絶賛する敬いの心、慈悲の心、おもてなしの心は仏様の心これが日本人の誇りとする要因なのかもしれない。

心も暖かくなーれ

おもいつき記

“この間、あるお母さんとのお話の中から”

私はいつも和顔愛語を心がけ、人に接する時など特にきをつけていて、周りの人は、あなたはいつもニコニコとして良いところ掛けですなと言われるのだが、嫁いだ先のお父さんお母さんは理解してくれていないようで顔とは裏腹に今、悩んでいるがどうすれば良いのでしょうか？と。

歎異抄と言う仏書の中に書かれている悪人正機説には「善人なおもて往生をとぐ、云わんや悪人をや」これは善人が救われるなら悪人（罪を犯したり法や道徳に反すると言う意味合いではない）こんな私が、の方がよけいに救われると言う言葉である???そんな馬鹿な、善人が救われて当然だと思うが、何故悪人なんだと考えてしまうが、世の中に善人といわれる人が果たして居るのだろうか、食べ物や飲み物を頂かないと生きてい（野菜にしても魚にしても肉にしても果物にしてもみんな命「細胞」）を撰取（えら）び生きて行く事の出来ない私たちである、それどころか、顔で笑って心では泣いたり苦しんだり悩んだりしている人ばかりなのだ、もしそんな人が居ないとしたら仏様は要らないし、ひよっとしたら人間ではないかもしれない、西本願寺の大谷光真門主が著書に「朝には紅顔ありて夕べには白骨のみぞのこれり」朝には元気で夕方には生命がないかもしれない」という「御文章のなかでこんなお話を書かれている。

親鸞聖人は、「自分は賢人だ、善人だ」といった意識にとらわれてしまうところをたしなめ、自分はよい人間だと思いついてしまふ事により、いつしか人の言うことを聞く耳をもたなくなってしまう、自分を善人と考えると、自分は正しい、間違った事は何もしていないという思いが先に立ち、私がこんなに努力しているのにと相手の立場を省みなくなってしまう、人間の考える「善」というものは、どんなに本人がそのつもりでいても、ひとりよがりなものであると云々。

さて、だからこそ、在りのまんまの私が今日一日を省みながら生命の存在を喜び、日々新たに生かされる仏様や親の願いが働きかけられているのだろうと思う。

お話のお母さんあなただけではありません、私もそうなのです。

おもい月記

今日四月八日はお釈迦様がお生まれになった誕生日であるが、さて何人の人がお祝いをするだろう。クリスマスやバレンタインデーならキリスト教の信者でなくても便乗のお祝い？をするけれど、日本の言葉や生活習慣となったお釈迦様の誕生祝いをしないというのは不思議ですね。

地球の中で縁あって生まれ何年何十年の生命を病氣をし、老けていきながら終えていく。これを生・老・病・死（四苦）、又、これに愛別離苦（愛する人と別れる悲しみ）・怨憎会苦（怨み憎む相手に会う苦しみ）・求不得苦（嫌いな人と一緒に住む不快さ）・五蘊盛苦（病氣やケガで苦しむ）の四苦を合わせると四苦八苦、この言葉、よく聞いたり言ったりするけれど、これも仏教から来ているのです。

要するに何事も自分の思い通りにならないことを表しているのです。しかしどうだろう、私達の身の廻りを見てみると、苦しみから逃げよう逃げようとし、忘れよう忘れようとし、反面、楽しいことやうれしいことを求め続け自分を見失っているのです。

おもしろいゴルフの話しましょう。ゴルフをされない方には判らないので、その説明からしましょう。

ゴルフの発祥はイギリスであるが、何と考え方は仏教だというのです??
本当のような冗談ですが、それは一つのコースを回るのに九ホールあって一ホールは三回（ショートホール）から四回（ミドルホール）・五回（ロングホール）の定められた数が三十六回、これを二つのコースを回れば一ラウンドだから七十二回打ったらパープレーといって基準なのです。

予算・決算を思い出してください。予算（予定）をくむとき、歳入歳出の金額は同額と決められています。どうでしょう。予定通りにはいきません。決算をすると余ったり、足りなくなったり、歳出が増えたと損（オーバー）、減ると得（アンダー）という数字？が四苦八苦。

では掛け算をしましょう。4×9=36、8×9=72は定められた私達の苦であり、四苦八苦は出発点なので七十二、時には〇日と言って、決められた境界をはみ出してしまふこともある（罪を犯す）ので、軽く七十二をオーバーしてしましますが、その人にはハンディキャップというのがある。これを仏教では南無阿弥陀仏（ナムアマミダブツ）苦しみや悲しみ四苦八苦（49・89）しながら光り輝いている仏様に照らされて力強く生き抜く（プレーして）いきましよう。

そして仏説阿弥陀經の中にある『青色青光・黄色黄光・赤色赤光・白色白光』
と言う言葉があります、青色は青色に光輝き黄色は黄色に光輝き赤色は赤色に光輝き白色は白色に光輝く、人に左右されたり頼るのではなく自分色に光輝く生き方をしてみたいと思う。

南無阿弥陀とは「ありがとう」と仏・仏？

おもい月記

五月二十一日は「親鸞さま」の誕生日だった。「親鸞聖人」は京都・日野の里に生まれられ、松若様と言いました、四才にしてお父さんの日野有範が戦に巻き込まれて行方不明になり、八才の時にはお母さんの吉光女が亡くなってひとりぼっちになってしまった、九才になって青蓮院の慈円和尚のもとで得度したのだが、その時、夜も遅く明日に得度の儀式をしようとしたとき、松若様は「明日ありと思う心のあだ接夜半に嵐の吹かぬものかわ」と慈円様を驚かしたと言う、桜がいくらかきれいに咲いていようと夜、嵐が来ようものなら一瞬にして花が散ってしまふように、私が出家しようとおもっても次の日には考えが変わってしまうかも知れないと歌はれたと言う、その後比叡山にて天台を学び、やがて法然上人の教えに会われ、男も女も、上も下の差もない教え、仏様から見れば私達は子供であつて、しっかりと抱きしめて下さる（これを他力本願とでもいうかな）道を示された方です。

その親鸞様の歌に、

和歌の浦和の片男波の寄せかけ寄せかけ返らんと同じ、一人いて喜ばば二人

と思うべし、二人いて喜ばば三人と思うべし、その一人は親鸞なり…

法は尽きまじ青草人のあらん限りはと歌つておられます。

普通、波は、ざざーっと寄せてくると、ざざーと返す波なのだが、和歌の浦和の波は、ざざーっと寄せるだけで返す波はないのだそうだ、その波を見て歌はれたのがこの歌でみんなひとりぼっちじゃないんだよ、仏様の願いが一方的に寄る波として私に掛けていて下さる（親が子どもに掛ける願いの様な代償を求めないもの）いつもそばについていますよと力づけて下さっている歌なのです。

さて現代を生きる子供や身のまわりを考えてみると、親や兄弟がありながら心が孤独な人が多い、いや増えているのではないのでしょうか。友達を求めてもお金や物に左右されて、本当の友達さえいない。こんな苦しいことがあるだろうか、こんな悲しい事があるだろうか。親鸞様は自ら寂しい生い立ちの中から仏様の出会いによって力強く生きられたのです。

生まれがたい人間に生まれ、年を増すことに苦しみや悲しみは大きくなる。

そんな私に立ち通しに立っていつも私を包む様な半眼の姿で想いを寄せかけて下さって有り難うございます。合掌